

助けあい、励ましあい、ともに生きる

一九八三年から始まった「国連・障害者の十年」は昨年で終了。万人のための社会づくりに向けて、今年から「アジア太平洋・障害者の十年」が始まっています。すべての人がともに暮らせる社会とは？ それには今どんなことが必要なかを考えてみます。



●障害者は特定の人？

県内には現在、身体障害者(身体障害者手帳所持者)が約七万四千人、知的障害者(療育手帳所持者)は約八千人が暮らしています。両方を合わせた数は県民全体の約四・四%。今後、高齢者の増加を考えると、心身に障害を持つ人はさらに増える予想されます。それは身近な親兄弟や隣人であったり、自分自身であったりするわけです。

●一人ひとりが輝く「くまもと」

熊本県は、総合計画の中で県民一人ひとりの価値観やライフスタイルを尊重する社会づくりを二十一世紀への指針としました。「一人ひとり」には、老若男女、心身にハンデのある人ない人、全ての人が含まれます。「障害のある人もない人も、ともに地域や家庭で暮らしていけるような社会を作ろう」。これは世界的に福祉の新しい流れとなっているノーマライゼーションという考えです。誰もが人間として尊重され、ともに生きる仲間として、助けあい励ましあう。

しあう。そして、それぞれが自分の可能性を一杯伸ばしながら輝いて生きる。そういう「くまもと」を目指しています。

●施設の障壁と心の障壁

障害者と健常者が同じ地域で助け合いの心を持つて暮らすには、二つの事柄が整備されなければなりません。一つは道路や交通機関、建物など、生活環境の整備。もう一つは障害者に対する差別や偏見をなくすという「心の整備」です。特に、意思伝達が不得意な知的障害を持つ方々については、これまで接する機会が少なかつたのも事実。しかし、ふれあう機会が増えれば、最初はとまどいがあっても互いに理解し合えるようになるでしょう。今月は、「ゆうあいピック熊本大会」の開催月。「ゆうあいピック」は、知的障害者のスポーツの振興を図るとともに、社会の知的障害者に対する理解を深めるためのものです。東京に続いて地方では初の全国大会。今、熊本は全国から注目を集めています。



「今度こそシュートを決めるぞ!!」



裁断部門では15年のベテラン。西次弘さん



チームの段取りを1人でこなす西やえさん

ノーマライゼーションの花開く

「ゆうあいピック」の出場選手たちは練習の真つ最中。そこには選手たちを二人三脚で支え応援している人たちもいます。学校、職場、施設、それぞれの場所で頑張っている皆さんの様子をレポートします。

優勝メダルをもって帰るぞ!

ゆうあいピックを契機にバスケットボールを始めた熊本養護学校の生徒たち。ドリブルがやっとだった生徒たちも、今では昼休みに自主的に練習しています。夏休みも返上で練習しました。バスやシュートなどの基本練習が終わると、次は先生たちとの練習試合です。障害を感じさせない生徒たちのプレーに先生も汗びっしょり。見事なシュートが決まると、応援に来ていた保護者から歓声が上がります。「大変だけど生徒たちの楽しそうな姿を見ることがうれしい」とバスケットボールを指導している中田大稔先生。「生活面でも動きがよくなり、「きつ」と言わなくなった。精神的に強くなったみたいですよ」と保護者にも好評。「スポーツの効果は思った以上ですね。生徒と先生と保護者がゆうあいピックで一つになった、そんな感じです」と佐藤吉晴校長先生。気分十分、ゆうあいピックが楽しみです。

自立、結婚。夢を次々と実現

ボウリングに出場する西次弘さん、やえさん夫妻は荒尾市にある縫製会社に勤務。社内ボウリング大会の成果が効を奏してゆうあいピックに出場します。二人とも荒尾小岱作業所から長浦通勤寮、グループホームを経て、今は自宅に夫婦二人で暮らしています。次弘さんの仕事は布の裁断。やえさんはミシンを掛ける前の下手間。同僚に「二人がいないと仕事はかどらない」と言われるまでになりました。この会社では従業員百三十名のうち二十名が障害者。グループホームや西夫妻の世話をしていて大江貢社長は、勤務時間外も料理を教えたり、買い物に付き合ったり。「年中一緒の家族みたいなものです」。次弘さんが車の免許を取得した時も、半年間毎日一緒に勉強したとか。二人の夢はと尋ねると、「家を建てることなんだろう?」と横から口を添える大江社長。二人の夢は大江社長の夢でもあるようです。